

目次

第21回大会に向けて	1	安原茂会員の逝去を悼む	12
2008年度研究集会報告	2	本学会顧問、安原茂先生を偲んで	16
ソシオロジー Rooted in Life	6		
		2009年9月国際シンポジウムのお知らせ	18
		事務局からのお知らせ	19

■第21回大会に向けて

浅野慎一・西原和久（大会担当理事）

日中社会学会第21回大会は、6月6日（土）、7日（日）の両日、名古屋大学において開催されます。つきましては、

- ①「報告要旨」の書式
 - ②「自由報告」の参加申し込み
 - ③「報告要旨」の宛先
 - ④お問い合わせ先
- をお知らせします。

「自由報告」や「報告要旨」のことでご不明な点がございましたら、右記のお問い合わせ先（浅野慎一研究室）までお尋ねください。

①「報告要旨」書式

- ・A4用紙、40字×40行、明朝体で10.5ポイント、横書き、2頁とする。
- ・氏名、所属、報告題目を明記のこと。
- ・そのまま複写されることを念頭に作成してください。それ以外の資料は当日配布としますので、各自で用意してください。

②「自由報告」の参加申し込みについて

- ・「自由報告」は、封書による「報告要旨」の送付をもって申込とします。
- ・申込締切りは4月30日（必着）とします。
- ・連絡先（住所・電話番号(FAX)・メールアドレス等)を忘れずにお知らせください。

③「報告要旨」の宛先

- ・〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
浅野慎一研究室

④お問い合わせ先

- 浅野慎一研究室
- ・電話：078-803-7780
- ・E-mail：asanos@kobe-u.ac.jp

■ 2008年度研究集会報告

首藤明和（事務局）

2008年度研究集会在、2008年12月13日、神戸中華会館において開催された。プログラムの立案や報告者のコーディネートなどで、浅野慎一理事（研究プロジェクト担当）を中心に準備が進められた。研究集会当日は、20名の会員・非会員が参加し、浅野会員が司会進行を務めるなか、5本の報告をもとに、活発な議論が交わされた。

それら5本の報告では、移動、階級（階層）、アイデンティティや他者性などが共通した論題として横たわっていたように思えた。欠乏の共有（階級社会）、不安の共有（リスク社会）は国境を越えて徹底化し、価値理念や文化規範などの「社会制度」はその正当性を喪失しつつ脆弱化し、家族や職業など「近代的準拠集団」との繋がりははいよいよ希薄化している。このなかで、私たちは、個人のことから社会のことまで、ますます多くのことを物語ることを強いられている。ポストコロニアルおよびグローバリゼーションの徹底化のなか、日常生活における私たちの「立ち位置」自体が、さまざまな歪みや痛みを構造的に生み出す基盤となっており、「人間らしく生きよう」と思えば思うほど、「日常＝既成」の「立ち位置」に安住することが許されなくなっている。利害の一致や権力による統治ではなく、私たちが「社会的存在」として生きるとはどういうことなのか。この社会学的に古典的な問いかけも、その答えの所在は、グローバリゼーションが進行するなかで、ますます「個人化」しているようにも感じた。

この眩暈を伴うような感覚を、今、アジア（日本）の現実を真摯に掘り下げようとする諸研究から、一様に感ぜずにはおられない。

- ・アラタンバートル（神戸大学）
「中国における少数民族社会の現状——モンゴル族在住者の教育を中心にして」
- ・坂部晶子（島根県立大学）
「植民地経験のライフヒストリーにかんして」
- ・田 洪涛（名古屋大学）
「中国から見た研修・技能実習制度——遼寧省大連周辺地域における帰国後の研修生・技能実習生を対象とした調査から」
- ・南 誠（日本学術振興会特別研究員・国立民族学博物館外来研究員）
「アイデンティティ・パフォーマンスの社会学的研究——『中国残留日本人』の名称と語りを手掛りに」
- ・中村則弘（愛媛大学）
「世界における中国社会の研究動向：国際研究集会の報告から」

アラタンバートル会員の報告は、内モンゴル自治区東部地域（通遼市ホルチン区）で実施した調査に基づき、農村から都市に移住したモンゴル族の変容（特に階層と格差）について、生活実態と教育の質的把握を通じて明らかにしようとした。

結論として、(1) 専門職・管理職に従事する「高層」では、職場において口語・文語での高度な漢語能力が要求され、漢語の壁にまつわる苦勞が多いが、モンゴル語で学校教育を受けたことを肯定的に捉えている。他方、「下層」（中卒・高卒の労働者・自営業者）は、自分たちが受けた「中途半端」なモンゴル語教育よりも、漢語で教育を受けたほうがよかったと考えている。(2) 次世代の教育に

ついて、「上層」は、子どもたちを初等中等教育で自宅校区内の進学校に、その後も大学進学・就職に有利な漢語学校に通わせ、家庭内では「意識的」に、モンゴル語・モンゴル文化を教えている。一方、「下層」も、子どもたちを漢語学校に通わせてはいるものの、自宅校区内の進学校へ通わせることは高い学費のために難しい。また、親世代自身、漢語を習熟していないため、「生活の必要」に迫られて、モンゴル語を世代間で継承することになっている。(3)家庭のなかでの日常生活に根ざした口語モンゴル語はある程度継承されており、モンゴル学校生徒の急激な減少は、必ずしもエスニック・アイデンティティの希薄化とは言い切れず、むしろその多様化として捉えるべき側面をもっている。

この報告を受けて、①「上層」「下層」の分類は、職業のほか、経済状況も勘案してのものなのか、②ケースの紹介が本文でなされておらず、質的調査に基づく報告といえるのかどうか、③調査地域の内モンゴル自治区内での特性を明らかにするために、人口構成に関するデータを、さらに詳細に示す必要があるのではないか、④族際結婚について一般的などのような実態があるのか、また調査ケースには含まれているのか、⑤「口語レベルでの言語継承と、エスニック・アイデンティティの多様化」の関連について更なる検証が必要なのではないか等の意見が出され、議論が交わされた。

坂部晶子会員の報告では、(1) 植民地社会は「構造的な非対称性」(差別)をもち、また、「構造的な強者—弱者という関係性」(権力)に貫かれた社会だとされた。そのうえで、植民地社会を、「平凡で陳腐な日常性の局面からとらえること」の必要性が主張された。具体的には、(2)満州国の歴史記述において、例えば、「民族協和」や「王道主義」といった統治のイデオロギーが、植民地社会の歴史

的・構造的な非対称性を隠蔽したことへの注視、(3)植民者、被植民者双方といったように、その「多声的な記憶の語り」を取り出す必要があること、(4)マスターナラティブとマイノリティの語りの対比から「もう一つの歴史」が姿を現すなど、「物語論の視点」がもつ分析射程などについて説明がなされた。

報告を受けて質疑応答では、①「多層的な経験の語り」が多元主義に陥らないようにするために、「植民地社会＝構造的な非対称性」という分析視点は十分だろうか、②「物語ること」によっては語りえない「自己」の部分があることを、どのように考えたらよいか、③「満州」の位置づけを、理論(物語論、記号論等)でやるのか、実証分析でやるのか、といった質問が出され、議論がなされた。

田洪涛会員の報告では、遼寧省大連地域を事例に、研修・技能実習制度による外国人労働力移動のメカニズムについて、特に送り出し主体に焦点を当てて分析がなされた。(1)送り出しメカニズムは、国有企业改革によって変化してきたこと、(2)それは、1984～1990年代後半の「国家主導型」から、1990年代後半以降の「地域主導市場ネットワーク型」への移行として特徴づけられること、(3)研修・技能実習制度では、斡旋企業と送り出しメカニズムが中国国内で完結し、移民ネットワークを形成しないこと、(4)「労務輸出」の実態と、研修・技能実習制度のあいだの深刻なずれは、「出稼ぎ」と「研修」のギャップとして象徴的であること、(5)研修・技能実習制度の本質は、「外国人労働者の定住コストを払わずに外国人労働者の労働力を利用しようとする事」であるが、研修生・技能実習生はどんなに優秀な労働力でも最大3年間しか雇用できず、日本企業にとっても労働力の確保でリスクやコストが高いこと、特に、地方の一部中小零細企業は、本制度に労働力調達を依存しており、「政治的リスク」

も高いことなどが指摘された。

この報告を受けて、質疑応答では、①研修・技能実習生が高額な斡旋料・保険料を支払ってまで日本に来るのは、それ以上の金額を日本で稼ぎ出す裏づけがあるのではないか、このことは、優良労働力のプールが経済的格差構造に下支えされていることとも関連しよう、②「移民制度が機能しない」というのは、むしろ、中国の労働力送り出しの社会制度にかかわる問題ではないのか、③「地域名士の個人ネットワーク」は、地域を基盤としているのか、あるいは、鎮・村と直接結びつくのか、国有斡旋会社との関係はどうなのか、④「市場ネットワーク」という言葉には違和感を覚える、個人的ネットワークに支えられた市場や国家のあり方がそれぞれに特徴をもつなかで存在するのではないか、⑤大連市中国国際合作公司是、最近、事業拡大が不可能な状態として捉えられているが、実際には、斡旋料・保険料の徴収が、緩やかな管理体制の下、むしろより巧妙になって、外部には見えにくい収奪システムへ変化したのではないのか、⑥研修・技能実習生送り出しの「国家主導型」に関して、その指標となる要素は何なのか、などの意見が出され、議論が交わされた。

南誠会員の報告では、「中国残留日本人」の名称と語りを手掛かりとして、「アイデンティティ・パフォーマンス」に関する社会的考察が行なわれた。

まず、問題意識として、「中国帰国者」をめぐっては、「やっと日本人になれた」といったように、喪失の物語、差別的な眼差しを前提にして議論がなされがちであること、したがって、「日本人になること」において、そこに「生成の物語の可能性」を見出すには、「アイデンティティ・パフォーマンス」(ジェディス・バトラー『触発する言葉』)がいうような社会構築主義の視点から、社会構造

と個人の位置取り戦略の相互関係に留意した分析が必要であることなどが述べられた。

続いて、分析視角では、「中国残留日本人」という名称に着眼し、「関係性」という視角から考察するとされた。すなわちそれは、「名称の形成と意味づけ」、「名称の規範化過程」、「節合の問題」を対自化することで「カテゴリー化の政治性」を暴きだし、このことを通じて「個人の生活世界」を浮き彫りにしようとする。ここから、「名称に根本的に依存することによってのみ存在する」「中国残留日本人」のあり方を、脱構築しようとする。

具体的に、「命名のポリティックス」での「名称の形成と意味づけ——ずらされる視線」に関しては、「中国残留日本人孤児」の命名とその定着について分析がなされた。「残留」「孤児」といった言葉が、「引揚者との区別＝カテゴリー化・細分化」として働き、その結果、包摂とともに排除を促してきたこと、記憶空間を限定することで責任の所在を曖昧化してきたこと、また、社会運動・メディア・政府の承認などを通じて、犠牲者的意味の付与と再生産が強まったことなどが明らかにされた。

続いて、「命名のポリティックス」での「名称の規範化過程——命名変更のレトリック」では、「残留」「孤児」をめぐって、政府、メディアだけでなく、例えば「日中友好協会と支援団体」、「中国帰国者2世と支援者」のあいだでの論争など、さまざまなポジションとそこからのレトリックのなかで「名称変更を求める運動」がなされてきたことが述べられた。ちなみに、ここでは、「日本政府の責任」を確認するという意味で「残留孤児」という名称は重要であること、運動における「残留孤児」という名称は有用性をもつことなどが報告者によって改めて確認されている。

さらに、「命名のポリティックス」での「節合の問題——呼びかけ様態と節合」については、中国国内での政治運動や映画鑑賞を通じ

て、残留日本人は戦争被害者と加害者としてのアンビバレンスなポジションに置かれていたこと、日本社会の言説空間で構築された「中国残留日本人」へ節合されて、加害者のポジションを脱落させていったことが説明された。

こうした議論を踏まえて、「アイデンティティ・パフォーマンス」に関する分析では、「聞き取りの場で語られるストーリー」、「場の規定によるストーリー」、「言語によって規定されるストーリー」、「『満州』をめぐる記憶」などが紹介され、モデルストーリーに収まらないストーリーを「掬いながら」、「生成する物語の可能性」を見出すとともに、中国残留日本人の姿を脱構築してゆく可能性と、今後の研究上での展望が示された。

質疑応答では、①モデルストーリーには収まらないストーリーには2種類あるのではないか、ひとつは非モデル的なものであり、もうひとつは「残留日本人」であることがすべてではないことから生じるストーリーである。後者のストーリーに関していえば、アイデンティティ・ポリティックスの問題で捉えられるのだろうか、②バドラーによる徹底した社会構築主義の方法を援用するならば、「残留日本人」の分析にあたっては、「日本人の血統」にまで踏み込んだ分析が必要になるのではないか、③場によって規定されるアイデンティティ・ポリティックスがあるのならば、一方で、場を規定し状況定義するような能動性をもったアイデンティティ・ポリティックスの姿もあるのではないか、④自己というものが、どのように捉えられるのだろうか、⑤人が人であることは、ポリティックスだけの問題なのだろうか、ポリティックスと近代のモラルティが強固に関連しあうなかで、他者へのコミットメントはハイ・モラルティの実践を強要されがちであり、むしろ、他者との相互関係の振幅を限定しているのではないか、などの意見が出され、議論が交わされた。

中村則弘会員の報告では、IIS（世界社会学機構）研究大会（2008年6月25-30）、香港大学（The School of Modern Languages and Cultures）主催のふたつのワークショップ（Critical East Asian Studies Workshop, 2008年4月2-3日; Comparative Studies of Families in Japan and China, 2008年9月18-20日）、および、南京大学社会学系20周年祝賀大会（2008年10月24-26日）など、国際研究集会での報告内容を通じて、世界における中国社会研究の動向が紹介された。

具体的には、(1)西欧・東欧研究と中国研究との連携の必要性、(2)西欧の理論にみる普遍性と限定性の混在に対する批判的認識の必要性、(3)キリスト教、ルネッサンスなどヨーロッパ文明に基礎を置く社会科学は、西欧理論に基礎を置いてのみ正しいという仮定を、その発想に染み込ませていることへの批判、(4)アジアからの概念定立の必要性、(5)分析概念や分析視角の設定では、第1に、中国社会への観察に基づく実態概念から設定するもの、第2に、権威付けられた既存の社会学の概念や視角に依拠するもの、第3に、前二者のあいだで「何とか設定できたもの」「迷走しているもの」の、大別して三様ある。中国研究の上で今後、もっとも可能性を秘めていると思われるのは第3の立場であること、(6)中国人研究者、非中国人研究者がともに着目しているキーワード（例えばグローバリゼーションと関連しての移民、民族、アイデンティティ、宗教、旅遊など）が、今後、重要な意味をもつであろうことなどが説明された。

■ ソシオロジー Rooted in Life

香港の大学の卒業式を体験して

宮崎紀子

(香港中文大学日本研究学科
Part-time Instructor)

香港の大学の卒業式に参加するには、卒業生になるか、その家族になるか、或いは学院長や主賓などになるしかない。2008年12月某日、私は無事に課程を修了し、卒業生として、香港の大学の卒業式に参加することができた。

卒業式に臨むに当たって、事前にガウンや帽子などの衣装のレンタルの案内が大学から自宅に送られてきた。レンタル料は銀行振り込みでということで、振込用紙が同封されている。また、ガウンの受け取りや返却の案内も詳細が英語と中国語で載っている。学位によってガウンの差し色が異なるということで、説明のため、写真まで同封されていた。また、式典は学部ごとに行われるとのこととスケジュールも記載されている。間違いようがない十全な説明と指示に、安心感を抱いた。

指定日に、ガウンを受け取りにキャンパスの丘の上のほうにある本部へと、学内を走っているシャトルバスで向かった。建物の1階には売店があり、そこでは、卒業式用の花束の予約業務を行っていた。私も1つということで、片手で軽く持てる、一番小柄なピンクのバラの花束を注文した。

式当日、会場付近はガウンを着用した卒業生とその家族がわんさかと集まり、写真撮影大会の場と化していた。屋外では芝生にテーブルが置かれ、飲み物の用意もされている。家族や友人と談笑しながら、皆式が始まるの

を待っていた。

時間が来て、厳かな気分で会場内に足を踏み入れる。席順は専攻ごとに、一人一人指定されていて、久しぶりに会う懐かしい顔の同期生が一行に座っていた。

と、会場にエドワード・エルガーの『威風堂々』の「希望と栄光の国 (Land of Hope and Glory)」の音楽が流れてくる。「希望と栄光の国」といえば、イギリスの第2の国歌とも言われている代表曲。中国に返還されたとはいえ、こんなところにもイギリス統治時代の名残を見てしまう。

出席者が揃い、いよいよ式が始まった。女性司会者は英語と広東語の両方で式を進行していく。しかし、研究院 (Graduate School) の院長も主賓も、また、卒業生のほとんども中国系であるにもかかわらず、スピーチは英語でのみで行われたことに気付く。法律関係もそうだったが、香港では学問の世界でも、英語優位なのだなどと改めて実感する。

式の後半には、研究院の院長と卒業生との握手がかなりの時間を割いて行われた。一人一人、名前が呼ばれ、壇上で院長と握手を交わす。そして、その場面をプロがカメラに収めていく。参加した全卒業生と握手するのも大変だと思うが、あくまでも爽やかに、スマートにこなしていく院長だった。

日本で大学を卒業した時とは違う感動がこの式にはあった。「真理を追究していくこと」の厳しさと気高さのようなものが感じられたのである。在学中も、そして今もなお、「真摯に学問に向き合う態度」を問われている気がしている。

2008 年秋 中国訪問記

大上博右
(兵庫県立神戸甲北高等学校
地歴・公民科 教諭)

はじめに

2008 年の 10 月 30 日から 11 月 3 日にかけて勤務校の先生 1 人と生徒 4 人を引率して上海にある姉妹校の位育中学校を訪れた。この学校は正確には高級中学校つまり日本の高等学校にあたる。中国政府の現代化政策を教育面から支える key public school であり、卒業生の多くは復旦や上海交通などの有名大学へ進む。

“Welcome to our school. How about your flight” 空港に迎えに来てくれた先生が手をさしのべて話しかけてくる。この先生とは 2 年前の訪問以来の旧知の仲である。握手し肩を抱き合う。東洋人同士でも使用言語が英語だと所作までアメリカ風になる。中国の学校を訪れたのに帰りの空港まで会話は英語で行った。漢字は充分に意思疎通できない時にのみ筆談で使用されたにすぎない。漢字文化圏に属する隣国であるが、お互いが一義的に学ぶべき外国語は遠く離れたアメリカの言語となっている。

位育中学校の授業と日本の授業

位育中学校のカリキュラムは英語と理数系およびコンピューター科学に重点が置かれている。パンフレットには「本校は英語もしくは中国語の留学先として最適です」と記されている。それ以外の人文科学系や社会科学系の講座は少ないようだ。勤務校に比べると必修科目が圧倒的に多く選択科目が少ないことも目に付いた。

英語・物理・数学の授業を参観することが出来た。言葉は理解できなくとも授業のスピ

ードから予習を前提としていることがわかる。どの教室も黒板ではなくパワーポイントを使用している。教師は大量の「板書」事項を淡々と解説し生徒は必死でノートを取りワークブックをこなす。発問は生徒の解答の正誤確認のためになされている。教科内容は高度であり授業の展開方法は日本の一昔前の受験校と似ている。ハイテクを駆使した教材により効率化を図っている。

これが日本ならば板書事項を精選し生徒の負担を軽くする、発問は生徒一人一人の学習動機を高める為に個々の生徒に最適となるように工夫して行う。生徒が衆人環視の中で誤った回答をして恥ずかしい思いをすることは避ける。展開は対話形式をとりいれ生徒の「勉強」感をなくする等の配慮が随所に見られる。

位育中学校の教師と日本の教師

2 年前の訪問では教科別に分かれた職員室を「アポなしの一人」で訪れてみた。準備された公式の訪問では得られない本音の会話がしたかったからだ。教師 4 人で充分な広さの一部屋を使用している。すべての教師に両袖で幅広の木製机と天井まで届く木製の大型書棚が与えられている。机も書棚も日本の校長室のものと同レベル以上の高級品であるが書籍が山積みになっていた。「高いレベルの授業をするためには教師も勉強しなければなりません。受け持つ授業科目数も少なくして専門教科の十分な準備を可能にします。他教科である社会科の事はよく知らないが 1 つか多くても 2 つしか科目を持たないはず。」教員専用の喫茶室でボーイさんが入れてくれたコーヒーを勧めながら英語の先生が笑顔で私に話しかけたことを思い出した。

これが日本なら教員 50 人程度で大部屋を使用する。校長と教頭以外の教師には片袖の標準サイズの事務机が与えられる。一人あたりのスペースが狭いので書棚などは物理的

に無理である。机の上には書籍を置かないことが望ましく「机上無一物」を推奨する学校もある。視線を遮るものがなければ教員相互の顔や雰囲気がよくわかり生徒の様子を常に知るのにも好都合だからだ。「子供達一人一人の個性にあわせた授業をするためには目線を子供達にあわせること。本だけではなく子供の中から学ぶことが多いはず。教えようという教師目線はよくない。子供の多様なニーズに応えられるだけ多くの科目を開設し担当すること。自分の専門科目はこれですという態度はよくない。」何度となくそれに類した言葉を聞かされた。

どちらが「正しい」などは決めようがない。何が「よい授業」「よい教師」であるのかは、教室の中の教師と生徒の関係のみで決まるのではない。時代や社会のあり方、その国がおかれた状況に規定されるところが大きいと思う。

ポストインダストリアル社会の教育

過剰なまでの「思いやり」に囲まれる日本の生徒達と消化不可能なまでの「学習量」に追われる中国の生徒達。日本の生徒達は自分の個性に応じた科目を選び、好みのスタイルで楽しく授業を「消費する」。中国の生徒達は国家が決めた科目を履修し、効率重視のスタイルで勉強させられる。日本の教師達は絶えず生徒達が「尊重されていると感じているか」を確認し微笑みを絶やさない。ちょうどサービス労働者が消費者に気を配り笑顔を絶やさないように。中国の教師達は絶えず生徒達が「知識を習得しているか」を確認し叱咤激励を絶やさない。ちょうどハイテク製品の工場技師が労働者に対して世界水準の製品を生産しているか監視の目を絶やさないように。

Post-industrial Society の段階に入りつつある現在の日本においてはあらゆるもの

が「ソフト化」と「サービス化」を免れ得ない。ポストの名を冠せられたものはすべて永続しない。未だ正体不明のものに暫定的に名付けたにすぎない。姿を現しつつある社会の正体が「知識社会」であるならば「ソフト化」と「サービス化」を「優しさ」と「快適さ」と解する教育だけでは対応が困難であろう。

現在の中国の教育は Post-industrial Society（正確には Post-Capitalism Society）がマルクス主義社会でないことを自明の理としているように筆者には思われた。イデオロギーではなくテクノロジーが支配する知識社会としてポストの名を冠せられた社会の正体を考えている。英語と理数系およびコンピューター科学に重点を置くのはそのためであろう。彼らは（少なくとも位育中学校に関しては）教員をサービス労働者というよりは知識労働者として考えているようだ。だが人文科学系や社会科学系の教育は軽視されている。テクノロジーとその理解のための基礎知識は、過去の偉大な遺産や現代社会に関する知識と結びついてこそ社会的な創造性となるはずだ。将来の指導者を育てる学校としてこれでよいのだろうか？将来のマネージャー向きのカリキュラムとしては最適だろうけれども。

上海の光と影

曇りがちの午後であったが授業の後で上海市街を案内してもらった。途中で橋の上から万博に向けて建設中の信じられないほど大きな建物が見えた。前回の訪問でその速さに驚いたリニアモーターカーは来年には杭州まで延長されるとも聞かされた。

2年前に訪れたとき「世界で最高層」として紹介された88階のビルの隣に100階のビルが新築されていた。安くない料金を払って登った最上階は雲の中だった。東京の高層ビルで見かけるのと同様の人達が携帯電話で話をし、記念撮影をしていた。床はガラス張

りなのだが見晴らしは良くなかった。対岸の旧市街には中国にとっての屈辱の歴史であるかつての国際共同租界がある。豆粒のような人の姿が時折見えるのだが、すぐにガスに覆われてしまう。あまりに高所に登ったためにかえって地上が見えにくいのだろう。

生徒がホームステイに出かけた後に路上の散策を試みた。外国資本の高層ビルと高級ショップが軒をつらね、高価な洋服を着た女の子が欧米人と手をつないでいた。

一步裏手を歩くと大勢の乞食や生後間もない子供を抱えた母親が何人も路上で生活していた。一人の子供はほとんど破れたパンツ一枚で母親に抱えられて寝ていた。あの生徒は今後とも学校へ通う機会がないと聞かされた。大勢の障害者も路上で生活していた。通り過ぎる私達に手を差し出してお金を乞い求めた。片方しかない腕を差し出してきた私と同年配の女性の苦痛に満ちた表情は忘れ難い。

ホームステイの先と後で

ホームステイに先だって姉妹校の生徒に簡単なオリエンテーションを行った。本当に出来る生徒ばかりであった。私は同じ内容を日本の生徒には日本語で、中国の生徒には英語で説明したのだが、中国の生徒のほうが素早く理解する。

上海で姉妹校の生徒と接するといつも私は自信を喪失し日本の将来を色々と考えてしまう。不思議なことに私が引率する日本の生徒は決してそのようなことはない。格段に違う英語力に接しても、高度な授業に参加してもあまり劣等感を感じない。ホームステイ先の家庭で本がいっぱいの書棚を見て驚き無邪気に記念撮影してきた生徒が何人かいた。自分たちの家には中国の家庭と負けないくらい大型の液晶TVはある。しかしこのような書棚は見たことがなく驚いたと口をそろえていた。またその感想をホームステイ先

で述べたとのことであった。

おわりに

私には2年間メールを交換している姉妹校の卒業生がいる。今では中国有数の名門大学の学生である。正月に彼女に長いメールを送った。彼女の母校である位育中学校訪問の感想を延べ、最後に「ウォールストリートの一部の強欲な人たちが引き起こした失態により日本では何万人もの人達が職を失った。中国も大変でしょうね。」と付け加えた。

彼女からも長い返事が送られてきた。その最後は”However cold this winter is, we believe in our country.”と結ばれていた。中国と日本の学生の最も大きな違いを感じた一瞬であった。

シンガポール史に名を残した 華人女性たち

合田美徳
(香港中文大学歴史学科
兼任助理教授)

筆者は、シンガポールの華人社会の研究のために1996年から2000年までシンガポールに滞在していた。当時のシンガポールは、建国後30年ほどしか経っておらず、多民族から構成される国民に、如何にして国家アイデンティティを涵養していくかということが、教育の最優先課題の1つとされていた。数年間の滞在中に、筆者は何度か地元の小中学生と接する機会や、日本の高校に当たるジュニア・カレッジを見学する機会を得たが、その際に、彼らとの会話や、学校における授業の参与観察などを通して、国家アイデンティティを涵養することを目的とした歴史教育が、シンガポールでは非常に重要視されているということを知り、歴史教育の中でもとりわ

け、個人、集団、組織を問わず、「建国の過程でシンガポールのために尽くした人々」がクローズアップされているという印象を受けた。そして、今回、ニューズレターに寄稿させていただくに当たり、歴史教育でも登場する、シンガポール史に名を残した華人女性について紹介したいと考えた。

シンガポール史に名を残した華人男性は数多く、抗日戦争の英雄リム・ポーセン（林謀盛）や、戦後の華人社会の指導者タン・カーキ（陳嘉庚）、そして建国の父と称えられているリー・クアンユー（李光耀）上級相などが挙げられるが、女性となると数は少ない。その中でも、教科書にも登場し、伝記も出版され、1990年代後半に放映された中国語連続ドラマ『和平的代価』の中で実在の人物として描かれたエリザベス・チョイ（蔡素梅）は、筆頭格と言えるだろう。1910年にマレーシアのサバ州で生まれ、英語教育を受けたエリザベス・チョイは、第二次世界大戦中、シンガポールでオペレーターとして働いていた。このとき彼女は、自らの危険を顧みず、無線によって情報を違法に仲間に流すことによって抗日活動に荷担し、最後には日本軍によって破壊工作者としてとらえられ、長期にわたって夫と共に拷問を受けた。ドラマ『和平的代価』でも、目をふさぎたくなるほどの拷問の様子が、生々しく描写されていた。

戦後、1950年、エリザベス・チョイは、戦時中の行いを評価されて、英国植民地総督から大英帝国勲章を授与された。1948年以降、シンガポールでは立法議会選挙が実施されたが（22議席中6議席が選挙によるものである）、議会での使用言語は英語、有権者も英国籍所有者という非常に限られたものであった。そのような状況下、勲章受章者で英語教育を受けたエリザベス・チョイは、1951年、英植民地政府の任命で、シンガポール初

の立法議会女性議員としてノミネートされている。しかし、全てが順調であったわけではなく、その前年の1950年には独立党から、1955年には進歩党から立法議会議員選挙に立候補しているが、共に落選している。1955年以降は、それらの政党に代わって人民行動党（PAP）が台頭してくることになる。その後、彼女はいくつかの学校で英語教師や校長を長年勤め、教育者としてシンガポールの教育にも貢献した。現在、シンガポールで公的教育を受けた人々のほとんどが、波乱万丈な人生を送った彼女のことを国民的英雄であると認識している。

戦争のヒロインとして有名なエリザベス・チョイのような個人以外で、シンガポールの歴史に名を残した華人女性といえば、19世紀から戦中、戦後にかけて、シンガポールの“基礎”を築いてきた「紅頭巾」と呼ばれる女性たちが挙げられるだろう。19世紀以降、華人の方言グループである「幫」によって、シンガポールの華人社会では、金融業界、海産物業界、飲食業界、自動車業界、質店業界などといった職業分担がなされてきた。特に戦前は、それらの仕事は男性によって占められていたが、その中でも異色の存在であったのが、建築労働に従事していた広東省三水県出身の女性たちである。

19世紀、三水県の女性は、中国女性の伝統的習慣であった纏足をせず、男性と同様に力仕事に従事していた。一説によれば、三水県では古くから女性が重要な労働力としてとらえられ、纏足をすることが無駄なことであると考えられていたことや、他家から嫁いできた女性を人一倍働かせる風習があったためである。19世紀末期から戦前にかけてのシンガポールにおける建築労働者の多くは、三水幫の女性たちによって占められており、彼女たちは常夏の炎天下で、直射日光、風や埃

を遮るために、赤い正方形の頭巾を頭に被っていたことから、「紅頭巾」と呼ばれた。「紅頭巾」の大半は独身で、かつてはチャイナタウンに居住していたが、1980年代以降、都市開発に伴いチャイナタウンが整備された際に、ブキメラの公営住宅（HDB フラット）に集団転居した。

現在、80歳以上になっている「紅頭巾」たちは、1人で或いは元“同僚”とともに、ひっそりと生活している。毎年、春節（旧正月）になると、当時の「紅頭巾」たちの功績を称えて、外資系保険会社が彼女たちを新春の食事会に招待したり、ボランティア団体が彼女たちを、かつて住んでいたチャイナタウンに連れていったり、「紅包」（お年玉）を渡したりすることが恒例となっている。筆者の聞き取りと参与観察によれば、2001年の春節イベントに出席した「紅頭巾」の中で最年少の69歳の女性は、11歳から建築労働に従事していたといい、最年長の94歳の女性は、80歳まで働き続けていたようだ。

19世紀末期から戦後にかけて、「紅頭巾」を被って建築労働に従事した三水幫の女性、同じく建築現場で働きながら「黒頭巾」をトレードマークにした広東系の台山幫、新会幫、開平幫、恩平幫の女性、「三角頭巾」を被って荷物運搬を生業とした女性などは、個人名こそ伝わらないものの、集団としてシンガポールの歴史に名を残した女性たちであると言える。彼女たちの幫や仕事の内容は、「頭巾」によって容易に見分けることができた。現在、彼女たちに代わって建築労働に従事しているのは、マレーシア、タイ、バングラディシュなどからの出稼ぎ男性であり、かつての「紅頭巾」たちはすでに皆“退役”している。

この他に、白い上着に黒のズボンという出で立ちで、「媽姐」と呼ばれた広東省出身の

女性も、シンガポールには数多く存在していた。かつて「媽姐」の世話になったことがあるシンガポール人も少なくない。「媽姐」とは、いわゆる住み込みメイドのことで、そのほとんどが、貧困のために、中国から若くして南来し、独身のまま、その生涯をメイドの仕事に捧げ、シンガポール社会に貢献してきた。1997年に、筆者は中国語のドキュメンタリー番組として放映された「媽姐」特集を視聴したが、その中では、シンガポールで休みなく働き、故郷に送金を続けていた元「媽姐」たちが紹介されていた。彼女たちの多くは、送金によって裕福な暮らしをしている故郷の親族から疎んじられ、“退役”後、故郷に帰ることもできず、シンガポールで細々と暮らしていた。45年間奉公してきた雇用主の家族から、血の繋がった祖母のように扱われ、雇用主の家族とともに幸せに暮らしている80歳の元「媽姐」の姿も、番組内で紹介されていたが、これはごく稀な例であると言えるだろう。

現在、「媽姐」の多くは、「紅頭巾」と同様に、ブキメラ地区のHDBフラットに居住している。彼女たちの唯一の楽しみは、「紅頭巾」と同じく、毎年、春節時に、ボランティア団体などが企画する食事会などの賑やかなイベントだ。2001年にイベントに出席した82歳の元「媽姐」は、「14歳で渡来したが、その頃は今のような労働基準法はなく、1日も休まず働き続け、雇用主に嫌われたら終わりだった」と当時を振り返っていた。現在は、白色の上着に黒色のズボン姿の「媽姐」を見かけることはなくなり、フィリピン、インドネシアなどからの外国人女性が、彼女たちの仕事を引き継いでいる。将来、シンガポールの経済成長と発展を支えた人物として、東南アジアや南アジアからの外国人労働者が、歴史的に名を残す日が来るのだろうかと考えると、非常に興味深い。

■安原茂会員の逝去を悼む

高橋明善（東京農工大学名誉教授）

11月18日、安原茂会員が逝去された。享年80歳だった。安原さんが考えていたことや業績について、片鱗に触れることによって、追悼の意を表したい。

安原さんの研究は、大別して①日本農村研究、②都市ならびに地域社会研究、③日本文化とりわけ農村・地域文化の研究、中国とアジアの研究の四つの分野で行われている。日中社会学会の追悼文章でもあるので、中国研究へのコメントから始め、主要研究分野である日本農村研究を中心に安原理論の核心に触れてみたいと思う。

定年前、安原さんは、大学同僚の宇野重昭氏とともに、鶴見和子氏や中国の費孝通の氏らと協同して中国の研究を行った。鶴見氏が提唱した「内発的発展論」を理論的指針に、費孝通氏が提案した蘇南モデルの地帯で、都市農村関係、農業と企業、小城镇の調査が行われた。農業と結合した社隊企業から、農工分離を経て、集団企業、村営企業、郷鎮企業を生み出しながら経済発展がもたらされたとする地域である。外部大資本の主導による発展がもたらされた珠江モデル地帯に対し、内発的発展論を検証するに相応しい地域であった。（宇野・鶴見編「中国農村の変化と内発的発展」成蹊大学アジア太平洋研究センター、1994年。「農民工と兼業農家」、宇野・朱通華編「農村地域の近代化と内発的発展論」国際書院、1991年など参照）

この研究での安原さんとの研究交流について、宇野氏は安原さんの成蹊大学定年記念号の「成蹊法学」45号（平成9年）で次のように述べている。「安原教授」は「その研究方法はどちらかというと欧米の社会学の方法で、鶴見教授の反近代化論的接近と原則的に対立していたように思われる。しかし筆者が、鶴見教授に挑戦して、その強固な反近代化論より、近代化論と内発的発展論の相互触発論へと変形させる間、安原教授はその可能性の幅の中でつとめてわれわれを理解しようと努力して下さった」。

鶴見氏の反近代化論的内発的発展論に対立する安原さんの視点とはどのようなものだったか。安原さんの学会への登場は遅く、昭和36年33歳の時、「農民層の分解と農村の支配構造」（村落社会研究会年報第8集）が最初の論文である。翌年「地域住民の生活構造」島崎・北川編「現代日本の都市社会」（三一書房）を発表している。その他アジア研究に関する論説が同じ時期発表されているが、後に簡単に触れる。安原さんの最も中心的な研究分野である農村研究での方法的視点は「戦後日本農村社会分析の基礎視角」（「成蹊大学政治経済論叢」第十六集第一号、昭和41年）で方向性を明確にした。

安原さんが農村研究の学会、村落社会研究会（現日本村落研究学会に登場したのは、農地改革をめぐる封建論争や、それとかわかって問題化した共同体論争が一段落し、改革自作小農民と彼等の生産と生活を支える村（共同体）が、資本主義化、都市化の中でどのように変化するかが議論の中心になる時期であった。

安原さんはこうした農村の変化を社会的につかむために、農民層分解を農村社会構造の変動を生み出す基礎理論として考えた。小農民の家と家の関係として現れる生活組織、社会組織、それらを包み込んで形成される部落の運営、部落協議費等に見られる共同生活のあり方、総体としての村ならびに農家生活が変動・解体していく過程を、農民層分解による農民層の性格変化を軸に於いて追究しようとした。1961年以降1970年代中頃に安原さんは、村研年報に9本の農村論文を載せる。村研会員中最多の執筆回数である。

マルクス理論をふまえて、社会分析の基本に階層・階級をおいたのは農村研究、都市研究に共通している。しかし、同時に安原さんは社会学者であった。マルクス理論を社会学に適用するにあたって、マルクスの「Verkehr」（交通）概念と「資本の文明化作用」概念を重視した。交通概念は、昭和30年代初頭鶴見俊輔氏によってコミュニケーション問題として注目されたが、社会学に取り入れたのは上記「現代日本の都市社会」における北川隆吉氏の論文だった。

深読み込みかも知れないが、安原さんは都市と農村を結節する物理的交通関係、コミュニケーションを含む精神的交通関係、社会関係・組織・集団における人間関係における交通関係の三つを考えていたと思う。

資本主義の浸透は都市化を伴いながら、農民層を分解させ、伝統的封鎖的共同体的な思考行動様式、家や村の生活組織や社会組織を変化させる。交通を重視する観点から、農民層分解は単に生産力問題としてだけではなく、都市との関係での農業の再生産構造との関連でも説かれる。ここには鈴木栄太郎の社会分化論との結節点を見ることができる。

こうした変化は「資本の文明化作用」と共に論じられた。初期の段階では、「文明化作用」は伝統的な小農民の生活組織、共同体的地域文化の解体、人間と人間関係の原子化、アナーキーな社会分業、社会戦争、農民や労働者の生活破壊・窮乏化など消極的否定的社会過程と共に語られた。しかし、70年代に入る頃から、文明化作用の積極面も注目される。その背景には、昭和30年代末からの市民運動、住民運動の隆盛化、生活の社会化を廻る新しい共同性の展開がある。村研でも村の解体、生活破壊を論ずる段階を経て農村自治、村の再生を共通課題化するようになる。安原さんは70年代になると、「地域の自立」「地域の復権」「共同性」「住民運動」など階級視点を超えて市民社会論的視点から新しい地域作りを論ずるようになる。共同体の解体が「人間にとってどんなにいたましかろうとも」というマルクスと共に安原さんはその解体を肯定していたのである。

「交通」関係の発展は「資本の文明化作用」とともに、人間生活発展にとってもつ積極的な意味を持つものとしても主張されるようになった。マルクスによって「総ての歴史に貫通する市民社会」として捉えられた概念が、家、村、共同体の解体の後に資本の文明化作用によって陶冶されて現れる「近代的な市民社会」として再把握される。安原さんが展望するのは、伝統的共同性をふまえながらもそれを超えて形成される新しい市民的原理に基づいた共同性、地域の自立、市民文化の形成であった。

安原さんの文化論には次のようなものがある。「日本農村社会学と柳田学」（『成蹊法学』第九号、昭和51年）、「実証的凝視の基底と展開」（『鈴木栄太郎著作集、第七巻解説、昭和52年』）、「戦後の農村調査の系譜と遺産」、「戦後改革期の農村調査」、「戦後社会科学の農村研究」（後の3点は福武直編『戦後日本の農村調査、東大出版会、昭和52年所収』）、「地方文化研究の視点と問題状況」（地域社会研究会年報第一集、昭和54年所収）、「布施鉄治、石川淳志、安原、高橋共編の『現代日本の地域社会』所収（昭和58年）の『地域社会と地域文化』」などが安原さんの主要な文化論の論考である。

交通、資本主義の文明化作用について上記の諸論文で早くからふれていたが、本格的に論じたのは上記の最後の論文である。ほかに「布施鉄治著作集上巻」の解説でも晩年の考え方が示される。（北海道大学出版会、2000年）。同じ問題を早くから論じていたのは、安原さんの盟友布施鉄治氏であり、彼との議論の中で、思索は深まったと私は考えている。

鶴見氏の反近代化論的内発的発展論 に対して、安原さんは、資本主義化を通しての「交通」の発展、「資本の文明化作用」を肯定することによって、宇野氏が指摘したように「対立的立場」にたっていたといえるのである。

関連して、いくつかの点を付言しておきたい。

①1960年代安原さんはウエーバーを下地においたインド、セイロン、フィリピン、ビルマ、タイ、イスラムについての6本の宗教社会学的な研究論文がある（主に日本エカフェ協会・編刊）。殆ど知られていないこれらの論文に唯一注目して論じたのは、橋本和孝「一つの宗教社会学的研究——安原茂によるアジア宗教社会学」（関東学院大学1998年「文学部紀要」。同1998年「社会論集」）である。橋本氏は安原さんの「宗教社会学的研究」「経済発展阻害論的な、近代化論に基づく」としめくくっている。

②1962年（上述）都市論の論文で、安保の運動経験の中で登場したばかりの、「」地域民主主義」論に肯定的に触れている。安原さんの市民社会への関心は初期から一貫していたといえる。

③安原さんは単純な近代化論者ではない。彼の文化論は日本文化論を含んでいる。柳田国男の民俗学への沈潜を出発点とし、農村社会学における有賀左衛門、鈴木榮太郎における日本の文化伝統への関心等を通じて膨らんだ問題意識を現代の農村・地方文化論に結びつけて考えようとした。安原さんは「歴史の重圧の中でも失われてはならないものを慈しみ、守ろう」。（前掲、「成蹊法学」定年記念号での加藤法学部長の安原紹介）としたのであり、そのことを軸にして、地域文化、地域社会の再生を 考えていた。しかし、私は、安原市民文化論と、安原日本文化・地域文化論の間には断絶があり、両者はなお、統一されなかったと考えている。

④安原さんは、鶴見さんの反近代化論的内発的發展論には批判的であったとしても、別の意味で内発的發展論を主張していたと思う。地域文化の再生、地域の復権、農村自治等が、彼の「地域社会論」の中で繰り返し語っているからである。その思いが、日本の文化伝統への沈潜と結びついていると考えられる。

中国研究では、安原さんは実証に徹し、中国社会論を積極的に理論展開するにいたっていない。慎重であったといえるだろう。何を考えていたかは、宇野氏の最初に引用した言葉がよく示していると思う。私も同じ頃以後、4回彼等の調査地近くの蘇州を訪れている。蘇南モデルの農村発展のあり方を調査もした。当時、郷鎮企業、生産請負制農業や村の運営など、全体としての集団性は、なお 閉鎖的であった。確かに、内発的發展のモデルとして語られるにふさわしい。しかし、安原さんは農村の中に、やがて社会主義的市場経済といわれるようになる経済発展の芽を読み取り、市場経済のもつ文明化作用、交通の発展の可能性を考えていたのだと思う。このことが、鶴見、宇野両氏との見解の相違として、調査研究中に議論されたのではないかと考えるのである。蘇州には今や日本資本の大工場が林立していることも付しておきたい。

安原さんの業績に関しては「成蹊法学45号」の安原記念号を参照されたい。

①中国関係論文では他に次のようなものがある。

「小城镇と近代化に伴う農村の変化」（NIRA政策研究湯1巻9号、1989年）

「上海居民委員会の構造」（青井和夫編「中国の産業化と地域生活」平成8年）

②その他の重要な編著書と「記念号」掲載以後の主要な論文

島崎稔、安原茂編「重化学工業都市の構造分析」（東大出版会、昭和62年）。

これは、執筆者26人、訳1、000頁、10年の共同研究の成果である。

「島崎稔、美代子著作集」全十一巻の編輯責任者、平成16年完結、全体の編輯責任と、編者前書き（解説）を内4巻に執筆。

編著「地域生活の復権」有斐閣、昭和57年。

③地域社会学会会長、日本農村研究学会副会長として職責を果たした。成蹊大学定年後愛知大学教授に就任。76年発足の「地域社会研究会」（現「地域社会学会」）結成呼びかけ人として重要な役割を果たした。

最後に安原さんについて私的思い出を二、三語らせて戴きたい。

成蹊大学定年後安原さんは息子さんが開業する病院近く、千葉の片田舎に転居した。やがて、夫人が入院され、自らインシュリンを打ちながらの一人暮らしの晩年であった。当初は、電話がかかって、「交通」研究会を開こうなど元気がよかった。晩年は、東京に出ることもままならない体調であった。しかし、意外と筆まめで、時折葉書が舞い込み、最後には昨年3月だが、議論をふっかけていた。息さんが仕事の都合で転居しあとは、気弱になり早く死にたいと電話で語っていた。

最後にあったのは、彼を研究の道に導き入れ、師とも兄とも慕っていた島崎稔氏と美代子夫人の著作集全11巻の刊行完結のお祝いの席においてであった。編輯責任を背負った安原さんは、余程うれしかったのであろう。医者に禁じられている酒を、引き留めようもなく飲み続けていた。

故布施鉄治氏（北大）は無二の友だった。昭和40年前後の島崎邸で開かれた毎年の忘年飲み会のある年、二人のことを私は歌に残している。「酒席にて 何をと立ちて なぐりあい 眼鏡が飛びて 争いのやむ」。布施氏の葬儀に私と二人で参列し、その著作集の解説も二人で執筆した。忘年飲み会の出席者の多くは亡くなり、島崎夫人と高橋のみが残された。古くから親しかったが、安原さんをほんとに身近に感じるようになったのは、1990年頃二人だけで沖縄農村調査を2回行ってからであり、懐かしい思い出が沢山ある。気に掛かるので時々電話をしていたが、気安く研究や学会、そして何よりも農村や社会学について話したり、聞いてもらえたりする包容力のある敬愛する先輩だった。

死の直前、いよいよ一人暮らしが困難となり、「女房の ホームに入ると 電話あり 安らぎ得しか 日ならず逝けり」。この間、たった20日しかなかった。

安原さんのお通夜、葬式は寂しかった。遠方であり、日本社会学会大会とかちあったこともあろう。比較的寡作の人でもあった。このままでは忘れ去られるかも知れない。しかし、改めて、その仕事全体に目を通して見て、農村社会学、地域社会学そして、社会学における中国とアジアの研究史の中に名前と仕事をとどめておきたい人であると思った。

■本学会顧問、安原茂先生を偲んで

中村則弘(愛媛大学)

昨年11月18日、本学会顧問、安原茂先生(成蹊大学名誉教授)が急性心不全で他界された。享年80歳であった。

安原先生は、福武直、青井和夫、宮城宏という歴代の会長を支えてこられた。ただし、先生の生き方で



あったのだろう。会長や事務局長などの役職への就任は避けられ、「ご意見番」、「擁護者」の役割に徹してこられた。

「燠銀」という言葉が似合う研究者だった。豪快で繊細、思いやりにあふれた先生だった。酒豪であられた先生への万感の思いを込め、旧日中社会学会HPにあった、左の写真を再掲させていただく。

先生との思い出はつきない。村研などでの農村社会学をめぐるご活躍については、別の場に譲ることとし、日中社会学会で取り組まれた内容を簡単にまとめておこう。

1991年から当時の青井和夫会長と陸学芸所長(中国社会科学院社会学研究所)を中心に遂行した中国調査において、取りまとめた役割を果たされた。この共同調査の成功は、本学会の基盤づくりに決定的な意味をもった。さらに、1997年6月1日と2日に成蹊大学で開催された第9回日中社会学会大会は、先生のご尽力の賜物であった。この大会の成功もまた、本学会のターニングポイントとなったものである。そのほか、

時々「ご意見番」・「擁護者」として先生から本学会が受けた支援は計り知れない。

これら取り組みのなかでは、愚直なまでに、若手を育てるということに徹しておられた。先生との対話から、われわれは多くのことを学ばせていただいた。日本での調査研究の逸話、内発的發展と関連した宇野先生、鶴見先生との中国調査のお話、福武先生の思い出など、懐かしく思い出す。どのお話にも、先生の思慮と思いやりがあふれており、知らず知らずのうちに当時の若手たちは育てられたと思う。その思いやりの深さは、私生活においても感じられた。成蹊大学退官に前後し千葉の海岸近くに転居されたのも、奥様の体調を気遣ってのことだったと聞いている。

晩年、ご自身の体調もいま一つであられた。先年、無謀にも日中社会学会大会での講演をお願いした。受けてはいただけなかったが、つらそうに逡巡しておられたお声は、いまだ耳元に残っている。無理なお願いをしたこちらの方が申し訳なくなった記憶がある。

安原先生…、いまやなし。



「安原先生のような研究者・教育者になりたい」というというのが、若かりし日の率直な思いであった。おおよそ達していないことが、先生に対し情けない。いささか気恥かしいが、心の空洞を、いまだに埋められないままにいる。

やんぬるかな。いまは先生のご冥福を心からお祈りするばかりである。

本学会の若手の方々にお願いがある。どうか以下の書物に改めて目を通していただきたい。若手育成に心をくわいておられた先生への、何よりの追悼だと思えてならないからでる。

安原茂「農民工と兼業農家」（宇野重昭・朱通華編『農村地域の近代化と内発的発展論—日中「小城镇」共同研究』国際書院, 1991年）。

——「上海居民委員会の変遷」（青井和夫編『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会, 1996年）。

——「はじめに(地域権力と「社区」建設の変容)」（青井和夫編『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会, 1996年）。

——「前言(中国の産業化と私的経営者層)」（『日中社会学研究』日中社会学会, 第6号, 1998年6月）。

晩年の思いが示されている論考をあわせて紹介しておく。

安原茂「“ムラ”の変化・断層」『村研ジャーナル』No. 20, 2004年3月。

首都経済貿易大学主催・日中社会学会後援

2009 年度秋季・国際学術シンポジウム開催のお知らせ

「中日経済与社会発展問題論壇」

理事・陳捷 (愛媛大学)

事務局・首藤明和 (兵庫教育大学)

首都経済貿易大学主催・日中社会学会後援により、2009 年 9 月 12 日、北京の首都経済貿易大学において、国際学術シンポジウムを開催します。

○主催・後援

- ・首都経済貿易大学 (金融学院) 主催 日中社会学会後援

○開催日時

- ・2009 年 9 月 12 日 (土曜日)

○開催場所

- ・首都经济贸易大学 (中国・北京)

○シンポジウムの内容

- ・日中の比較の視点から、「経済と社会」の新たな発展モデルを探究する。
具体的なトピックとして、経済と金融、市民社会、グローバリゼーションのなかの経済と社会、移動 (ひと・もの・情報等) 等

○論文提出の期日

- ・2009 年 6 月 30 日

○報告者の募集 (若干名) (2009 年 5 月 31 日まで)

- ・報告者を若干名、募集いたします。下記の項目について、事務局 (首藤) までご連絡ください。
 - ・氏名と所属
 - ・報告題目 (仮題でもかまいません)
 - ・報告要旨 (1200 字程度)

今後、本シンポジウムの詳細については、ニューズレターや学会 HP にて広報します。
また、ご不明な点などございましたら、事務局 (首藤) までお問い合わせください。

■事務局からのお知らせ

○入会について

(2008年12月～2009年3月承認)

陳 文飛

所 属：日本福祉大学大学院人間環境研究科

関心領域：法社会学

金 明華

所 属：お茶の水女子大学大学院

関心領域：中国メディア、大衆文化

古賀章一

所 属：大阪市立大学大学院創造都市研究科

関心領域：中国のNGO

夏扎提古麗・沙吾提

所 属：神戸大学大学院総合人間科学研究科

関心領域：中国高齢者のメディア接触

須藤健太郎

所 属：大阪産業大学経済学部

関心領域：中国の教育、メディア情報に関する諸問題

聶 海松

所 属：東京農工大学大学院

関心領域：人口社会学

○編集後記

2008年11月18日、安原茂先生(成蹊大学名誉教授・日中社会学会顧問)がお亡くなりになりました。今、こうして先生のことを想いだけでも、パソコンの画面は涙で見えなくなります。本当に残念です。

小生は、安原先生のような方にお会いしたくて、このような業界に入ったといっても過言ではありません。世の中に対する反発が強まるなか、心の底から議論できる人と出会いたかったからです。

まだ、職もなく、先が何一つ見えないときに、愛知大学での研究会にお誘いいただいたことがあります。研究会の晩は例によって酒を友とした座談会、一緒に痛飲し激論を交わしました。翌日、二日酔いで腰をかかめていると、背中を思いっきり叩かれ、「酒呑みの矜持を忘れるな！」と叱咤されました。本当に温かくユーモアのある先生でした。

また、時折、お見せになられていたご苦悩の姿が、「真摯に生きてこられた人の重み」として、小生の心に強く刻み込まれています。

昨年は、『日中社会学叢書』への激励のお電話を何度もいただきました。その時の張りのある大きなお声が耳に残っています。

苦しく挫けそうになることも多いのですが、安原先生をはじめ、諸先輩方が歩んでこられた道、遺してくださった木々を思いだしながら、小生も、同じ志を持つ方々のために、残りの学会役員の任期を全うしようと思います。(首藤)

日中社会学会ニュースレター No.55

発行：日中社会学会事務局
〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1
兵庫教育大学・首藤明和研究室
info@japan-china-sociology.org
shuto@hyogo-u.ac.jp
tel・fax: 0795-44-2165 (研究室直通)

○吉岡智子 (事務局・業務補佐)
nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp
tel・fax: 089-927-9366

○日中社会学会・郵便口座
口座記号番号：00140-9-161801
加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式 HP
<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2009年3月